

ルーヴル美術館と《観衆》についての試論

松岡 智子

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2009年10月1日 受理)

1. はじめに

ルーヴルは12世紀末、フランス国王フィリップ・オーギュストがパリを守る要塞として建設した時から始まり、以後、歴代の国王の住居や行政機関となり増改築が繰り返され、現代に至るまで800年にわたる波乱万丈の歴史をもつ、他に例を見ない稀有な建造物であると同時に、世界屈指の美術館でもある。

20世紀後半の大事業として、ミッテラン政権下での《大ルーヴル計画》により1981年以降、大規模な改修工事が行われ、中国系アメリカ人の建築家I. M. ペイ氏により、1989年、ナポレオン広場にガラスのピラミッドが建設された^(註1)(図1)。

それから今年はちょうど20年目となる。この間にも、ルーヴル・コレクションは購入と寄贈により増加の一途をたどっている。展示室は2800室あるが、35万点にも及ぶ収蔵品のうち展示されているのは、そのうち1割にも満たない。コレクションばかりではない。展示空間もめまぐるしく変化している。1993年、リシュリユー翼を占めていた大蔵省を移転させ展示室とし、2000年、シラク大統領の強力なイニシアティヴにより、パヴィヨン・デ・セッションにアジア、アフリカ、オセアニア、アメリカの展示室が開設された。これで、古代オリエント美術、古代エジプト美術、古代ギリシャ・エトルリア・ローマ美術、絵画、彫刻、工芸、イスラム美術、グラフィック・アート部門を含め、全部で9部門となった。そして、2004

年、「アポロン・ギャラリー」の改修に続き、2005年、「モナ・リザ・ルーム」の改修工事が完成、映画「ダヴィンチ・コード」の世界的ヒットにより話題を集め、2010年には、ヴィスコンティの中庭にイスラム美術部門の新館が開設されるというように(図2)、絶えず発展し続けるその姿は、驚異的ですらある。

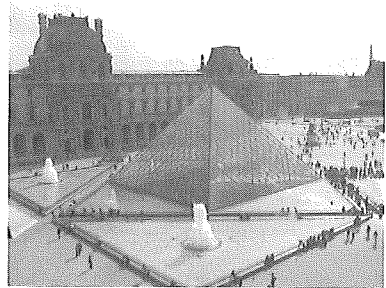


図1 ガラスのピラミッドのあるナポレオン広場(2009年6月、筆者撮影)

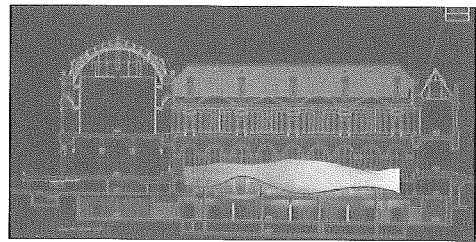


図2 マリオ・ベリーニ、ルディ・リッチオッティ「ヴィスコンティの中庭」のイスラム美術部門の完成予想図

この20年間で、利用者へのサービスもはるかに充実度を増した。展示室の主要作品の横には、解説や作家の来歴を記した（以前にはなかった）パネルが配置され、お目当ての「モナ・リザ」や「ミロのヴィーナス」に出会えるよう、矢印で方向を示す看板が至る所に設置されているので、もう迷うことはない。マルチメディア・ガイド（フランス語、日本語、英語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、韓国語。また、フランス語による手話付きのもの）もあり、見学したいコースを選択することができる。専門書が充実した書店やミュージアム・ショップ、5つのカフェや夜間開館日には22時まで営業しているレストランもある。また、ピラミッド下のナポレオン・ホールから逆ピラミッドの間には、子供向けの書店や「サイバー・ルーヴル」、郵便局や両替の窓口、スターバックス・カフェが並び、ショッピング・アーケードや駐車場も隣接している。さらに企画展も開催されるようになり、アトリエでのワークショップ、オードトリウムでは、講演会、フィルム上映、コンサート、子供向けの催しも行われる。身体障害者のために車椅子を無料で貸し出し、フランス語または英語での道順ガイドがつき、ベビールーム、医務室も完備し、ツーリスト向けの他に、26歳未満の青少年、引率教員、専門家向けのパスもあるなど、至れり尽くせりである。

しかし、問題点がないわけではない。現在、ルーヴル美術館の年間入館者数は800万人を超えているため、「モナ・リザ」を静かに鑑賞するなどほとんど不可能であり、トイレやカフェ、レストランは常に満員状態、ピラミッド下は太陽光が入りすぎると混雑とで、特に夏は空調があっても暑く息苦しい。今のルーヴルは入館者が多すぎるのである。

とは言え、ルーヴルが《観衆》を強く意識するようになったのは20世紀後半からであり、わずか半世紀にすぎない。本稿ではルーヴルが《観衆》、とりわけ、これまであまり視野に入れられなかった子供たちに積極的に手を差し伸べるまでの経緯を概観してゆく。

2. 《観衆》の変容：「臣民」から「人民」へ

18世紀、ルーヴル宮殿の「サロン・カレ」では、王立絵画アカデミー会員の作品展が定期的に開催されており、すでに展覧会場としての機能を果たしていたが、「グランド・ギャラリー」の一部が革命政府によって正式に「中央美術館」（Museum Central des Arts）と名づけられ、国有化された美術品を収蔵する美術館として開館するのは1793年8月10日である。この日は、王宮となっていたテュイルリ宮が襲撃され国民公会が王権の停止を宣言した一周年記念日にあたる。革命時代には展示スペースとして「グランド・ギャラリー」（図3）全体と「サロン・カレ」、「アポロン・

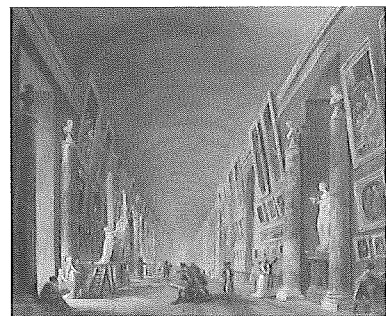


図3 ユベール・ロベール作「グランド・ギャラリー」1801年頃、ルーヴル美術館蔵

ギャラリー」も使用されるようになり、王室コレクションの他に教会や亡命貴族宅から接収された美術品が加わった。そして、同じ年に王立アカデミーが廃止されると、画家ダヴィッドの影響下にあった美術館管理委員会は、同時代作家の手本、すなわち、ドイツの美術理論家ヴィンケルマンの新古典主義美学を重視した展示を推進する。

開館当初、10日のうち5日は模写希望者のため、3日は一般の国民のために無料で公開され、残る2日は清掃日に当てられていた。フランス革命によってルーヴルは、もはや王の「臣民」でも教会の「信徒」でもなくなった「人民」にとって、芸術を享受する権利の平等の表象となった。そして、<「美術」とは宗教や政治に従属するものではなく、それ自体が人間の「人格形成」(教養)の資となる>とするヴィンケルマンの思想は、ルーヴルを「王宮」から、人間の再生を目指す教育を重視した「芸術の殿堂」としての「美術館」に変容させるにふさわしいとされたのである^(註2)。

続くナポレオン帝政期、ルーヴルは、ヨーロッパ遠征による収奪と購入により所蔵品を増し「ナポレオン美術館」へ名称変更し(1802年)、質量とともに世界一の美術館となる。10日のうち6日は外国人、学生、芸術家、3日は一般のフランス国民に公開され、残る1日は清掃日に当てられるようになった。1807年と1812年には収奪品の展覧会も開催され、大勢の人々が訪れた。1800年には28の行政区博物館が設立され、ようやく学芸員が任命された。ルーヴルでは、1804年から1830年までは2年か3年おきに官展「サロン」が開催され、その後、1848年までは毎年、行われている^(註3)(図4)。

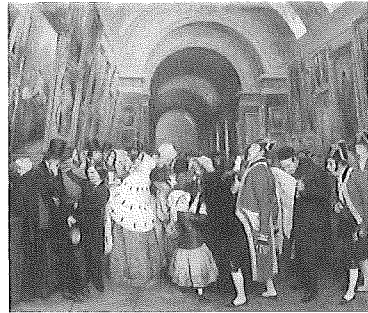


図4 オーギュスト・フランソワ・ピアール作「4時、サロンにて」1847年、ルーヴル美術館蔵

しかし、ナポレオンが失脚しルイ18世が即位すると、1815年、ウィーン会議での取り決めにより略奪した作品の4分の3以上が返還された。王政復古の時代、1821年に「ミロのヴィーナス」がルーヴルに寄贈されたことにより古代ギリシャ・ローマ部が、1826年にはジャン・フランソワ・シャンポリオンを部長として古代エジプト部が開設された。1824年、美術館の規則が改正され、日曜日と祭日が一般公開日となり、他の日は芸術家と外国人の見学が認められた。7月王政の時代、1847年には、コルサバードでのポール・エミール・ボッタによる発掘調査により「アッシリア展示室」が開設された。第二帝政の時代になると入館者数は増加してゆき、1855年に開催されたパリ万国博覧会を契機に、清掃日にあたる月曜日以外、すべての来館者がルーヴルを見学できるようになった。パリの都市改造が行われ、アンリ四世の時代から計画されていたルーヴル宮とテュイルリ宮を連結する工事も1857年に完成し、8月14日、皇帝ナポレオン3世が参加し落成式が行われると、あらゆる階層の人々が訪れ、地方からパリにやって来た労働者階級の名所にもなった(図5)。1863年にカンパナ侯より購入した古代ギリシャ、エトルリアの壺などの美術

品、及びイタリア・プリミティヴ絵画のコレクションが、1869年にはラ・カーズ博士の遺贈による17～18世紀絵画コレクションが加わることで、展示室は多様性に富んだものとなった。1882年、学芸員を目指す学生に対して、美術品を前にした現場教育を目的とするエコール・ド・ルーヴルが美術館内に創設され、美術史教育が公式に認められるようになったことは特筆すべきことである^(註4)。1895年には国立博物館連合が設立されている。

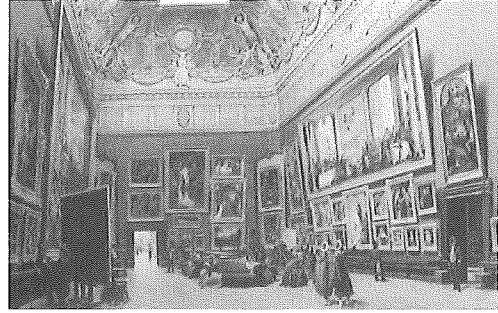


図5 ギュセッペ・カスティリヨンの作「サロン・カレ」1861年、ルーヴル美術館蔵

19世紀のルーヴル美術館の入館者数に関する記録はほとんど残されていないが、唯一、1892年10月27日火曜日から12月1日まで（月曜日と11月1日火曜日を除く）の30日間の入館者数が明らかにされている。延べ9万4326人で、そのうち7万9520人が11月中に来ており、平均すると平日が2342人、日曜日は7153人という記録が残されている（それから100年後の1992年11月のルーヴルの入館者数は26万4081人で、平均すると平日は9490人、日曜日は1万8811人に達している）^(註5)。

19世紀、すでにルーヴルはヨーロッパの知識人たちにとっては憧憬的となっていた。例を挙げるとフリードリヒ・ニーチェは、1871年、パリ・コミューンでテュイルリ宮に火が放たれたことをスイスのバーゼルで聞き、ルーヴル宮も焼失したのではないかと心配のあまり、数日間、呆然とし涙と疑念で身をやつたという^(註6)。焼け爛れたテュイルリ宮は1882年に撤去され、ルーヴル宮は現在のような「コ」の字型となった。さらに、アドルフ・ド・ロッツルド男爵（1900年）、イサック・ド・カモンド伯爵（1911年）をはじめとする収集家たちの工芸品も収められた。また、デルフォール・ド・グレオン男爵による遺贈により、1922年、「イスラム展示室」が開設された。コレクションや入館者数の増加によって、収蔵品の系統的な展示も行われるようになり、鑑賞経路も整備された。1897年の「ルーヴル美術館友の会」会員数は、すでに3000人に達している。

1920年代になると、ルーヴルの年間入館者数は50万人台となり、そのうち3分の2をフランス人が、3分の1を外国人が占めるようになった。また、入場料の有料化についても議論されるようになり、1922年7月18日から実施された^(註7)。1937年から夜間開館が始まった。それでもなお、ルーヴルが《観衆》に強い関心を示しているとは思われず、学芸員は美術品が建築物のことしか興味がないようであった。

1938年9月から1939年12月にかけて、ルーヴルの所蔵品の多くは地方に運び出され、ナチスの略奪や戦火から逃れることができた。1939年8月より1年以上の休館ののち、1階の一部のギャラリーではあったが、1940年10月1日から再び公開され（火曜日、木曜日、月曜日の午前11時から午後4時まで、日曜日は午前10時から正午までという制限つ

きだった)、「ミロのヴィーナス」のレプリカも設置されていた。「カレの内庭」はドイツ兵の捕虜収容所として使用されたこともあった。パリ解放の翌年、サロン・ドノンでは、1945年7月10日から「戦争中のルーヴルの活動」と題する写真による展覧会が開催されている^(註8)。また、1945年から1952年にかけて、ルーヴル宮の外装及び内装工事が進められ、かねてからの懸案だった、グランド・ギャラリーの天井からの採光も可能になった。また、1947年、「ルーベンスの間」の改装工事が行われた。収蔵作品数に比較すると、展示面積はかなり狭かったが、絶え間なく内部の改装が行われ続けた。

1950年代になるとルーヴルの入館者数は100万人に達していた。1953年、キュビズムの作家ジョルジュ・ブラックは、アンリII世の次の間の天井画「鳥」を完成させており、これは、現代作家の作品を恒久的にルーヴルに展示する最初の試みでもあった(図6)。最近では、シュリー翼の北階段横に、ドイツの現代作家アンゼラム・キーファーによる2007年作の壁画「アナトール」(図7)他、2点の作品を発見することができる。

3. 《観衆》の発見

(1) 社会学の視点から

1959年、文化問題省(現在は文化・コミュニケーション省に改称)が設立され、大臣に任命されたアンドレ・マルローは、ほぼ10年間、国家主導の文化政策の指揮をとり続けた。彼は「文化の民主化」、すなわちフランスの偉大な文化的栄光を国民が等しく享受できよう努めた。しかし、結果としてその政策は、新しい芸術を支えるというよりも、歴史的な文化遺産の保存を優先させることとなった。また、1963年には外交手段として、門外不出だった「モナ・リザ」がニューヨークとワシントンへ(図8)、1974年には東京とモスクワへ貸し出された。1964年には「ミロのヴィーナス」が東京と京都へ貸し出されている。

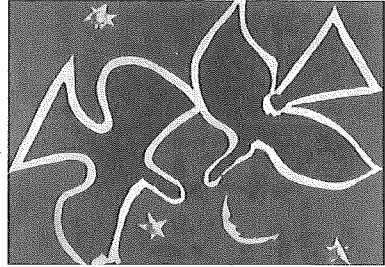


図6 ジョルジュ・ブラック作「鳥」1953年、アンリII世の次の間の天井画、ルーヴル美術館



図7 アンゼラム・キーファー作「アナトール」2007年、ルーヴル美術館(シュリー翼)

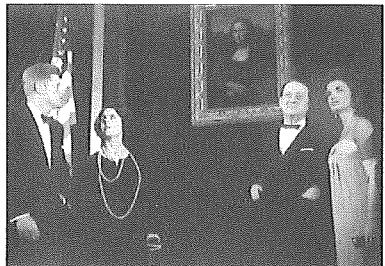


図8 1963年1月、ワシントンのナショナル・ギャラリーにて、「モナ・リザ」を囲む。左からケネディ、マルロー夫人、マルロー、ジャックリオン。

フランスの美術館における〈観衆〉について、科学的な調査が本格的に行われるようになるのは1960年代に入ってからである。社会学者ピエール・ブルデューの指導の下、フランス、イタリア、オランダ、スペイン、ギリシャ、ポーランドのミュージアムにおける入館者数、交通の便、学芸員の活動状況、展示作品数、所蔵品の数、ジャンル、質、展示方法などの調査が行われた。それとともに、〈観衆〉へのアンケートや面接によって、性別、年齢、住所、職業、学歴、世帯収入、展示方法や館員の対応、入館料に対する意見、ミュージアムへの訪問回数、好きな作家などについての調査と社会学的な分析が試みられた。この調査は文化問題省の研究調査局の要請によって企画され、特にフランスに関する調査に関しては、同省が経費を負担している。

その結果、ミュージアムへの年間訪問率が最も高いカテゴリーとして、職業別では大学教授及び芸術家、次に大卒以上の学歴をもった上級管理職、そして、性別では大卒以上の女性のいわゆるエリート層、年齢では15歳から24歳までが際立って高い比率を占めていることが明らかとなった^(註9)。アメリカではすでに、1920年代後半から〈観衆〉への科学的研究はなされていたが、フランスにおいては以上の調査研究に基づくブルデュー監修の著書『美術愛好—ヨーロッパの美術館と観衆』が基本文献となり、以後、他の社会学者にも大きな影響を与えることとなった。その後、社会学者オリビエ・ドナの指導により1973年、1981年、1989年、1997年、2008年にフランス人の文化的実践と消費についての、大がかりなアンケート調査が行われている^(註10)。

1968年の5月革命で上からの文化政策に異議が唱えられたため、ジョルジュ・ポンピドゥー大統領は「万人のための芸術と文化」のセンターを計画し、1977年、パリに国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術・文化センターが開設され、まったく新しい層の〈観衆〉を獲得した。入館者数は1年で600万人を超えるという予想外の大成功を収め、1983年には770万人に達している^(註11)。続くジスカールデスタン政権下では、老朽化したミュージアムの近代化、とりわけ順路が複雑になりすぎてしまったルーヴル美術館の改造、オルセー美術館設立計画も決定したが、文化予算は少額のままで、実行されたのはフランソワ・ミッテラン政権になってからである。

1980年代、ポンピドゥーセンターの場合を除き、美術館の〈観衆〉に対する社会学的研究は、科学博物館ほど盛んにされることはなかったにせよ、アメリカやイギリスの研究の影響を受けながら、次の2つの動向をたどるようになる。1つはフランス人の文化的実践の調査であり、もう1つは来館者増加のための戦略を目的とするものであり、展覧会に関する分析も行われるようになった。1980年代になると、入場料を払ってルーヴルを訪れる入館者数は、年間200万人に達するようになった。

1990年代には、人文科学と社会科学(社会学、言語学、記号論、心理学、歴史、経済)の横断的な発展とともに、様々な分野から〈観衆〉の研究が、大学やCNRSで行われるようになる。CNRSでは、1989年から博物館学をテーマとするプログラムが、また、

1990年から1993年にかけて、DMFの協力により国立教育省のプログラムREMUSが実施された。ミュージアムへの学問的アプローチの成果は、雑誌*Public & Musées*（リヨン大学出版により1992年に発刊されたが、2003年から*Culture&Musées*と改題されActes Sud社より出版されている）や*Muséologie*（リヨン大学出版）がある。また、DMFと文化財学院のドキュメンテーション・センターの発展も挙げられる。さらには1994年、ケベックで、翌年にはパリで関連するシンポジウムも開催された。そして、各研究所では公式に、博物館学的な、すなわちミュージアムの歴史と政治、社会的・象徴的实践、コミュニケーションを促進するための言説と戦略、〈観衆〉と展覧会の受け入れという4つの軸と周縁の、総合的な調査に取組み、その結果、新たなパラダイムが生じ、これまでの学問領域にも変化が起きている。また、Option Cultureなど民間の調査事務所では、文化的市場での取引きを行い始めた^(註12)。

ミッテランの下、文化大臣を務めたジャック・ラングは、さらなる「文化の民主化」を推進し、大衆芸術に対しても積極的な支援を行うようになり、予算規模は国家予算の1パーセント近くまで引き上げられた。「ルーヴルの大改造」は入館者数の急増をもたらし、1990年、年間入場者数は500万人を超えるようになった。

1994年5月、〈観衆〉をさらに科学的に調査するため、ルーヴルへの3箇所の入り口に常設調査機関であるOPPが設置された。その前年にはリシュリュウ翼が新たな展示スペースとして公開されたため、入館者数は620万人に達し（そのうち3分の2が外国人）、前年より100万人も増加し、〈観衆〉調査に拍車をかけることとなったのである。そして、来館者の言語に応じて9か国語（英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、日本語、ポルトガル語、ロシア語。2000年に中国語も加わる）によるアンケート調査が、週5日、1日4時間かけて行われるようになった。ランダムに選ばれた被験者は、見学ののちアンケート用紙に記入を求められ、終了後、用紙をインフォメーション・バンクに提出すると、御礼に3枚の絵葉書がもらえ、年間、約1万2千人が対象となっている。また、日曜日の有料・無料の入場料別の調査に関しては、マーケティング調査研究所SOFRESが行っている。

以上の調査の目的は〈観衆〉の分析であるが、最も重要なことは、〈観衆〉の満足度を理想として100パーセントにまで高めることである。OPPのアドバイスによって改良された1つの例として、インフォメーション・コーナーで配布される館内マップが挙げられる。11か国語（現在は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、日本語、ポルトガル語、ロシア語、韓国語、中国語、アラビア語）で記載されたマップは、見学には必須であり、「満足した」、「かなり満足した」と答えた割合は合計すると、以前の73パーセントから、1998年には91パーセントに上昇している。アンケート調査には、文化政策への分析を補強する意味をもち、「文化の民主化」という目的に対して、不平等の部分の明らかにする手段ともなり得るのである^(註13)。

2000年から2005年にかけて、ミュージアムの《観衆》についての社会的な視点による調査・研究による出版物、レポートや報告書、学術論文を合わせると、250の施設に関して700件に及んだ^(註14)。それらの大部分は1つあるいは複数の施設を特定した研究であり、他はミュージアムを地域やカテゴリー別に分類し、アンケート調査を行うものであった。そして、カテゴリー別ではルーヴルに関する研究が、全体の12パーセントを占めていることから明らかなように^(註15)、ルーヴルの《観衆》は最重要テーマとなっている。

(2) 学校教育の視点から

フランスにおいて、生徒や青年たちの見学に特別な配慮がなされるようになるのは、1950年代からである。1949年、国立ミュージアムに教育課が設置され、その後、ルーヴルをはじめとする、パリの主な少数のミュージアムに限り、教師の引率を伴った生徒のグループでの入館は無料となった。また、7歳から16歳までの子供たち、及び同伴者は木曜日の午後、これらのミュージアムに無料で入館することができるようになった。また、12月から5月にかけての木曜日には、学校の教育プログラムと関連した解説つき見学も実施された。そして、セヌ県教育局により、それぞれのミュージアムを統括する教育課に、専属の教師が派遣されている。こうした試みによってこの時期、来館する生徒数を増やすことが可能となった。1969年、従来の知識偏重の姿勢から、学ぶことを学び、社会を知る教育への転換を図る改革が唱えられ、初等教育において1週間のうち6時間、「覚醒の教科」(想像力や観察力を養うことを目的とした歴史、地理、理科、音楽、絵画などの教科)が当てられ、様々な方法が試みられた。高等師範学校とミュージアムの新たな結びつきもその1つである。それでもなお、特に美術館はほとんどの場合、大人の《観衆》にしか関心を示さないように見えた。

1970年以降、フランス博物館文化活動研究所は、国立教育調査研究所であるIPN(現在はINRP)の協力を得て、学校の教師と学校見学を担当する講師の両者による話し合いの場を設けることによって、この研究テーマへの関心がさらに高まった。その結果、ルーヴルでは子供向けの新たな活動が行われるようになった。この時期、フランスの学校と美術館の関係性についての先駆的研究を行ったM.T.ガゾは、仲介者の存在なくして、子供が作品に出会うことはできないと指摘し、主な仲介者に家族と学校を挙げている。そして、家庭と比較すると、学校こそ、より多くの子供たちを美術館に連れてゆける唯一の機関であると強調している。しかしながら、カゾによれば、国立のミュージアムの文化活動事務局には、芸術理解の手ほどきをする無料の解説つき見学のための講師は8名しかおらず、その他の学校専属の講師は教育実習を受けたことがなく、講師養成も急務となった。他方、学校と外部の世界との距離を狭めることを目的として、1977年、国立教育省と連携し、学校に文化活動が必須とされ、学校とミュージアムの関係は、再び危機が起らないよう新たな方向と目的に向かって、絶えず進展していった。

1980年代初頭になると、教育システムの刷新が求められ、教師は学校の外に出て、特にミュージアムで学習することを、これまで以上に奨励された。具体例として、文化省のイニシアティブにより、教育省とともに「遺産クラス」が設けられた。「遺産クラス」は、通常の授業の一環として、教室の外に出て行われ、文化、歴史、建築、考古学、文学、芸術、科学、技術等、興味に応じて、場所を選択することができる。現在、「遺産クラス」は、フランスのみならず他の国でも次第に成功を収め、「ヨーロッパ遺産クラス」として、新たな拡大を見せるようになった。法律の改正にともない、1990年、異なる文化組織と学校、特に優先的教育地区であるZEPとの連携プロジェクトを明確にすることが許可された。こうして学校は外部に開かれるようになり、本質的に変化していった^(註16)。

ルーヴルもまた、《観衆》について関心をもつようになった。それは単に入館者数を増すということではなく、その構成に注目し、特に若い《観衆》の関心を高め、文化に触れる機会の平等について熟慮するようになったのである。そのため、次の3点に力を注いでいる。まず、国内の学校教育と協力体制をとることであり、学校が遠隔地にある場合はインターネットを利用し、教室での質疑応答などによる、インタラクティブな交流に応じることである。2点目として、18歳から25歳までの若い層に無料パス・カードを発行し、啓蒙をはかった。そして、3点目に、学校以外の社会文化施設とも協力体制をとったのである。

さらに、1996年以降、ルーヴルでは、毎月第1週の日曜日の入場料を無料とした。その結果、他の日曜日に比較すると入館者は約7割も増加し、フランス国民が過半数を占めることとなった^(註17)。また、近年は、失業者に対しても入場料を無料とした。2006年の統計によれば、この年にミュージアムや展覧会に1回以上行ったことのある割合は、失業者が18パーセント、生徒・児童が41パーセントであった^(註18)。これは何よりルーヴルの歴史、すなわち、文化を享受する平等の権利を要求する「人民」の声により、ルーヴルが「王宮」から「美術館」として生まれ変わった、過去の記憶に基づいている。

4. おわりに

大型美術館の分館ブームは、近年の世界的な傾向であり、ルーヴル美術館も例にもれず、アラブ首長国連邦の首都アブダビと、フランス北部の都市ランスに分館を建設する計画がある。〈ルーヴル・アブダビ〉はフランスの建築家ジャン・ヌーヴェルが、そして、〈ルーヴル・ランス〉は日本人建築家グループSANAAが担当することに決定している(図9)。

特に後者は、炭鉱産業の斜陽によって衰退したランスで、マルチメディア・テ



図9 SANAA(妹島和世+西沢立衛)
ルーヴル・ランスの完成予想図

クノロジーを使用するなど、ルーヴルの所蔵品を新たな展示方法で紹介するとともに、北ヨーロッパの中心部にある立地条件を生かして、英国南部やドイツ、ベルギー、イギリス、オランダからの観光客を取り込もうとする、大いなる「実験」である。この「実験」によってルーヴルは、どのように新たな「観衆」を獲得することができるのか、その経済効果により、果たしてランスは、スペインのビルバオのように活性化できるのか、今度はいかなる「展示学」を駆使するのか、進化し続けるルーヴルについての調査・研究を、今後も進めてゆきたい^(註19)。

註

- 1) 「グラン・プロジェ」に至るルーヴルの変遷については、西野嘉章『博物館学—フランスの文化と戦略』東京大学出版会、1995年、松岡智子「博物館学の視点から見たルーヴル美術館の一考察」(『倉敷芸術科学大学紀要 創刊号』)、3-13頁、1996年を参照。
- 2) 松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2009年、211-225頁。鈴木杜幾子『画家ダヴィッド』晶文社、1991年、278-301頁。
- 3) Gérard Monnier: *L'art et ses institutions en France*, Gallimard, 1995, p.122-149.
- 4) リュック・ブノワ著・水嶋英治訳『博物館学への招待』文庫クセジュ、白水社、2002年、89頁。
- 5) Jean Galard: *Visiteurs du Louvre*, Éditions de la RMN/Seuil, 1993.
- 6) *Publics & Projets culturels, Un enjeu des musées en Europe*, L'Harmattan, 2007, p.239.
- 7) *ibid.*, p.238.
- 8) Guillaume Fonkenell (dir.) : *Le Louvre pendant la guerre*, Musée du Louvre Éditions, 2009.
- 9) Pierre Bourdieu et Alain Darbel avec Dominique Schnapper: *L'amour de l'art: les musées d'art européens et leur public*, deuxième édition revue et augmentée, les éditions de minuit, 1969. 邦訳書としてピエール・ブルデュー、アラン・ダルベル、ドミニク・シュナッペー著、山下雅之訳『美術愛好—ヨーロッパの美術館と観衆』木鐸社、2004年を参照。なお本稿のタイトルの「観衆」の原語であるフランス語のpublicは、しばしば公衆と訳されている。公衆とは『広辞苑』によれば、社会学で、広い地域に散在しながらも、マスメディアなどを通じた間接的なコミュニケーションによって世論を形成する人々の集合体となっている。本稿では先に挙げた山下氏の翻訳に示唆を受け、「観衆」とした。
- 10) O.Donnat: *Les Français face à la culture. De l'exclusion à l'éclectisme*, La Découverte, 1994. O.Donnat: *Les Pratiques culturelles des Français*, La Documentation française, 1998. O.Donnat (dir.): *Regards croisés sur les pratiques culturelles*, La Documentation française, 2003. O.Donnat: *Les pratiques culturelles des français à l'ère numérique*, La Découverte, Ministère de la culture et la communication, 2009.
- 11) 日本語版『ポンピドゥー・センター・ガイド』、Prestel, 2002, 6-11頁。
- 12) Jacqueline Eidelman, Mélanie Roustan, Bernadette Goldstein (dir.) : *La place des publics*, La Documentation Française, 2006, p.17-20.
- 13) Lucien Mironer: *Cent musées à la rencontre du public*, Réunion des Musées Nationaux, 2001, p.415-428.
- 14) 出版元として、*L'Harmattan, les Puf, La Documentation française, Armand Colin, Nathan*が挙げられる。また、学術総合雑誌に*Culture & Musées*がある。定期的に関連する内容を掲載した人文社会科学系雑誌としては、*Espaces, Mediamorphoses, Gradhiva, Réseaux, Ethnologie française*などが挙げられる。そして、職業的雑誌には*La Lettre de l'Ocim*と*Musées et collections publiques de France*があり、特に後者は、来館者についての研究の普及をうながすものである。
- 15) Jacqueline Eidelman: *op.cit.*, p.22.

- 16) Cora Cohen: *Quand l'enfant devient visiteur, Une nouvelle approche du partenariat École/Musée*, L'Harmattan, 2001, p.37-98.
- 17) 日曜日無料化の効果については、次の報告書を参照。Claude Fourteau: *Impact de la gratuité du dimanche*, Musée du Louvre, 1998.
- 18) *chiffres clés 2009*, La documentation Française, 2009, p.44.
- 19) 森美術館編『大型美術館はどこへ向かうのか？—サバイバルへの新たな戦略』慶應義塾大学出版会、2008年、118-135頁。太田泰人、水沢勉、渡辺真理、松岡智子『美術館は生まれ変わる—21世紀の現代美術館』鹿島出版会、2008年、31-34, 74-85頁。

本稿は、2009年8月2日（日）、筆者が名古屋市美術館で行った、「ルーヴルが〈子供たち〉を発見するまで」と題する講演の内容に基づいており、さらに大幅に加筆したものである。

The Louvre and The Public

Tomoko MATSUOKA

Collage of the Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2009)

Over the past twenty years, visitors to the Louvre have grown to over eight million a year since the I.M.Pei pyramid was built as part of the vast Louvre Project. During this time, public use and visitation of the Louvre has been studied in various fields. However, these studies have largely ignored the younger population. This paper attempts to describe the relationship of the Louvre and the French public, specifically cultural learning by children and young people.

In France, research in the fields of sociology and education have studied the importance of art museums to the younger public. Early research was conducted in the 1960s by the sociologists Pierre Bourdieu and Alain Darbel. Their methods included interviewing, completing questionnaires, and analyzing the results scientifically. To this day, their work not only remains fundamental to our understanding of the public role of museums, but also forms the principal method in reinforcing the politics of cultural policy in France by revealing the inequality of culture.

After the crisis of 1968, a radical reform of education was initiated. Many schools introduced the museum as classroom in an attempt to balance the over-emphasis on intellectual training with cultural leaning. In this way, the Louvre has become conscious of its origin, being transformed from a royal palace to art museum through democratic revolution, opening its doors for the enjoyment and learning of students and youth.